

# 人種／エスニシティ、階級、およびジェンダー： アメリカにおける理論と研究の発展

Race/Ethnicity, Class, and Gender: Development of Theory and Research in the U.S.

エスター・アンリン・チャウ

Esther Ngan-ling Chow

ホーン川嶋瑤子 訳

エスター・アンリン・チャウ教授は、University of California at Los Angelesで博士号を取得し、現在は米国ワシントンD.C.のアメリカン大学社会学部の教授である。1998年から1999年までアメリカ社会学協会のアジアおよびアジア系アメリカ部門の委員長に就任している。

チャウ教授の関心は人種／民族、階級、ジェンダー、グローバリズムと社会変化、移民問題など幅広く、特にアジア系アメリカ女性の仕事や家庭について精力的に研究活動を行っている。

著書には、1997年にThe Myers Center Award for the Study of Human Rights in North Americaを受賞した*Race, Class and Gender* (1996)の他、*Women, the Family, and Policy: A Global Perspective* (1994)等がある。

本稿は、平成11年10月2日に開催されたお茶の水女子大学ジェンダー研究センター主催の公開講演会「ジェンダー、エスニシティ、人種」において発表された講演の原稿である。

1960年代の第二波女性運動に呼応して、いろいろな学問領域における学者、研究者たちは、女性についての知と教育カリキュラムを変革し、あわせて、アメリカおよび世界の諸地域の女性の社会的地位改善をめざした政治的コミットメントを継続するために、理論と研究を発展させることに着手した。30年を超える学究的努力は、科学、人文学、社会科学におけるこれまでの研究が使用してきた、問題の多い仮定とバイアス（例えば、西欧中心的、男性中心的、人種差別的、階級的、異性愛傾向、ハンディのない身体中心）の点検に焦点を当ててきた。また、伝統的学問の内容、理論および方法を批判することと、社会に位置している男女の生活とジェンダー関係についてのフェミニズム学識を創り出すことに努力を注いできた。女性学・ジェンダー研究は学問領域として確立され、フェミニズムによる批評と知的啓蒙化を先導する努力の一部を担っている。知とカリキュラムのフェミニズム的変革は、今では主要な学科にインパクトを及ぼし、多くの領域が土台として用いてきた仮定、理論的視座、研究方法、証拠に、重要な変化をもたらしている。社会学もその例外ではない。フェミニズムは、セックスとジェンダーがどのように構築されているか、社会の諸制度においてセックスとジェンダーがいかに編成されているか、あるいは、社会変化はいかにして男女の社会的向上を達成できるか、についての社会学の焦点を方向転換させる上でかなりの影響を及ぼしてきた。

本論文の目的は、第一に、アメリカにおいて、人種／エスニシティ、階級、ジェンダーの連結についての社会学におけるフェミニズム的研究が、どのように理論的に発展し、関連の研究が行われてきたかをまとめることである。第二に、この領域における学識の前進のための重要な方向を論じることである。特に、私たちが共同編集した『人種、階級、およびジェンダー：共通の結束、異なる声』(*Race, Class, and Gender: Common Bonds, Different Voices*, Chow, Wilkinson, and Baca-Zinn, eds. 1996) に収録されている理論的、実証的研究について論じる。まず最初に、フェミニズムの知とカリキュラムの変革を理解するための歴史的背景を、段階理論 (phase theories) を用いて、簡潔に説明しよう。異なる段階のなかでも、ジェンダー・バランスのとれた知に関する包含的思考という最後の段階が、本稿の議論に最も関連している。その次に、アメリカにおける過去20年にわたる、人種／エスニシティ、階級、およびジェンダーをめぐる学識に関して、その理論的発展における主要なテーマに焦点を当てて取り上げたい。主に私たちの本からの研究を取り上げるが、他の重要な研究にも言及しながら、この理論的視座が、これまでどのように適用され分析されてきたかを示したい。最後に、この領域において、複眼的学識に向けての仕事をするための将来の方向について論じたい。

### カリキュラムと知の変革の諸段階

女性学を含めて、フェミニズム学識の発展は、概念化の仕方によって違いがあるが、5段階または6段階を通して展開してきた (McIntosh, 1983; Schuster and Van Dyne 1985; Tetreault 1985)。1960年代のフェミニスト学者は、第1段階として、女性を無視する傾向にあった伝統的学識を批判し、「女性の排除」を非難した。続いて、第2段階として、研究主題としての女性や知の生産者としての女性が十分に存在しない分野や学科で、欠落あるいは不可視の女性たちの探求を開始した。女性の不在についての認識の増加は、男性バイアスへの挑戦のみでなく、いろいろな分野で知的にも職業的にも排除されていた女性たちを発見し、知に編入していく意識的努力へと至った。例えば、イギリス人学者ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau) は、現代社会思想史において、社会学の母とも呼ばれるべき人物であるが、ほとんど認知されていなかった。彼女は、社会学の父として知られているフランス人学者オーギュスト・コントの『実証主義哲学』(*Positive Philosophy*, August Comte) を翻訳しただけでなく、長期のアメリカ旅行の間に行ったフィールドワークと参与観察の方法に基づいて、社会学における最初の方法論の本、『アメリカにおける社会』(*Society in America*, 1837) および『態度と道徳をいかに観察するか』(*How to Observe Manners and Morals*, 1838) を出版した。知への女性の編入の努力という段階は、忘れられた女性学者たちの貢献を発掘するために、いわゆる「追加してかき混ぜる (add-and-stir)」アプローチを用いた。また、中産階級の白人男性による卓越さの基準を用いて他を判断するというやり方によって、補足的学識を発展させた。

女性中心の学識への移行は、第3段階 (シユスターとダインによれば第4段階) で生じた。この段階では、女性は低価値化された役割の従属的グループとして見られ、女性の経験は問題化された。ここでの研究は、傾向として、女性と人種的／エスニック少数者を、歴史、社会制度、社会一般における広範で制度的な差別の犠牲者として見て分析した<sup>1</sup>。そこから、第4段階では、女性の歴史、文化、価値、イデオロギー、視座を明らかにするため、また女性たちの経験を知の主要な源泉として価値づけるために、女性は女性自らの視点で研究されるべきであるとなった。そして、フェミニズム研究は、多様な女

性のグループの経験と取り組む新しい問題を提起することによって、女性の経験の多様性を無視しているという批判に注意を払い始めた。1980年代の初めから半ば以降、女性を知に「編入」する最終段階は、女性を男性との関係で研究する「ジェンダー・バランスのとれた」カリキュラムへと展開してきた。包含的見方と思考は、ジェンダーが人種、エスニシティ、階級、性的指向、年齢／世代、ハンディキャップ、他の要因と交差するときの、差異と多様性に基づく、人間のさまざまな複雑な経験を考慮に入れる<sup>2</sup>。

### 人種／エスニシティ、階級、ジェンダーの連関

知とカリキュラムのフェミニズム的変革の核心は、ジェンダーの中心性だけでなく、人種／エスニシティおよび階級を分析の中核に組み入れることである。人種／エスニシティ、階級、ジェンダーの研究は、なぜ重要な研究分野として登場したのであろうか？この分野における系統だった研究は、いくつかの理由で、非常に必要となった。まず第1に、社会的多様性は、常にアメリカにおける現実であったし、今もそうあり続けている。そして実際、女性の経験は、社会的、文化的背景によって異なるのだ。女性についての知が妥当性をもつためには、女性という人類の多様性の社会的現実を真に反映するべきであろう。

第2に、アメリカの女性運動とその組織（例えば、National Organization for Women, NOW）は、白人、中産階級、異性愛の女性のニーズと課題に基づいた目標と関心事を中心にしていて批判された（hooks, 1984）。このカテゴリーに属さない女性たちは、「他者」として縁辺化され、彼女たちのニーズと課題は適切に取り扱われることがなかった。フェミニスト組織の排他的なやり方は、1970年代の中頃から次第に、いろいろなグループからの挑戦を受けてきた（Chow 1988; Combahee River Collective 1982）<sup>3</sup>。

第3に、ラディカルな有色女性たち、特に、黒人女性たちは、社会全体に存在する人種差別および階級差別と闘っている男性同士たちの運動に参加したとき、次第に、そのコミュニティの中にも存在する性差別主義を意識するようになった（hooks, 1984; Gracia, 1989）。例えば、黒人によって先導された黒人国民解放運動と公民権運動は、第二波フェミニズム運動に先立って発生した。もしこれらの運動がすべての参加者の解放と平等のために真に努力していたならば、黒人女性たちの問題と懸念事項を運動の中に取り込むことができたであろう。しかし、運動の男性指導者たちの多くは、彼らの性差別主義を認識することをあえてせず、彼らのアジェンダにおいて、黒人女性たちのニーズと課題を無視し、黒人フェミニストたちの組織化を人種の連帯に対する脅威として受け取った（Adler 論文および Barnett 論文、Chow et al, 1996 収録；hooks 1981）。近年における、黒人フェミニズムへの関心と黒人女性の経験の認知の拡大は、黒人女性たちを彼女たち自身の立場から研究する必要性を示している（hooks 1984; Dill 1979; Hull, Scott and Smith 1982）。このような人種およびジェンダーへの覚醒は、他の有色女性フェミニストグループについても当てはまる（Moraga and Anzaldua 1981）。

第4に、白人フェミニストたちは伝統的学問の男性中心的視座の批判で忙しく、彼女たちの仕事自体は階級バイアスと民族中心性にとらわれていた。そのため、社会構造に深く根差している人種差別や階級差別が、いろいろなグループの女性たちの生き方にいかに不利に影響しているかを理解することを不可能にしていた。消去されていた女性たちの発見のプロセスにおいても、有色女性たちの存在はまだ認

知されず、彼女たちの経験はまだ明らかにされるまでには至らなかった。

第5に、社会科学と人文科学の研究者たちは、ある種の女性についての知の誤った一般化と、それを他の女性たちにも当てはめることの不適切さについて、次第に認識するようになった。「女性学は、男性の経験を女性の経験に一般化するべきではないことを示した。同様に、有色女性による有色女性についての研究と著作は、白人中産階級の女性の経験をすべての女性の経験として一般化しないことの重要性を支持した。そのような一般化は、誤った一般化の1つ（白人男性の一般化）を他の誤り（白人女性の一般化）で代置するだけである。」（Andersen 1996, p. 13）

最後に、有色女性による有色女性についての実証的研究と著作の増加は、女性の人生についての理論の構築の中にそれらを取り入れることが必要であることを示す、説得力ある議論と証拠を提供してきた（Acosta-Belen 1979; Dill 1979 & 1983; Collins 1990; Ladner 1971; Mirande 1979; Moraga and Anzuldua 1981）。女性たちは一般的には一つのグループとして共通の結束を分かち合うものとされてきたが、これらの文献は、多様な有色女性の間異なる声と経験を認知する。このような認知は、有色女性によるフェミニズム理論の独自の発展を促す推進力となったのであり、ジェンダーの理解と行為の諸面を明らかにする、より広範な、より包含的なものへと、伝統的なパラダイムを転換してきた。フェミニズム学識がジェンダーについての視座を拡大したように、人種／エスニック関係、階級関係についての分析もまた、ジェンダーの視点を取り入れるようにその理論化を修正してきた（Baca-Zinn and Dill, 1994）。包含的思考はかくて、知とカリキュラムの変革を求める諸学科を横切って、共有されるようになった。

1980年代の初め頃から、ジェンダーを形づける主たる要因を再評価するプロセスにおいて、ジェンダーと共に、人種／エスニシティ、階級の顕著さと影響を複数のレンズを通して分析することは、決定的に重要であると認識されるようになった。私が共同編集した本は、知の境界を広げるために、このアプローチを用いて、他の有色女性フェミニストたちと力を合わせる共同的努力を表している。この本のテーマは、人種／エスニシティ、階級は、ジェンダーと同様に重要であり、それぞれが共通の結束の基礎として貢献すると同時に、いろいろな歴史的、社会文化的コンテキストにおいて、さまざまな男女の社会的構築を形付ける構造的関係と人生経験の多様な形態を生み出している、という点である。

6つの主要な問題をここに記す。それぞれが、以下で展開する理論的議論の主テーマに対応している。

1. 人種、階級、ジェンダーとは何か？
2. 人種、階級、ジェンダーは、いかに相互関連しているのか？
3. 人種、階級、ジェンダーの相互連関は、いかに、社会的諸関係のパターンを形成し、階層的な秩序へと発展していくのか？これらの関係は、いかにして階層的構造へと制度化されるのか、そしてその結果として、いろいろな歴史的、社会的コンテキストにおいて、異なる形の社会的不平等を生み出しているのだろうか？
4. これらのパターンは、いかにして男女の日々の生活に、社会的諸関係に、家族の内と外における労働のジェンダー化された分業に、現われるのだろうか？
5. 人種、階級、ジェンダーの同時性によって、どのようなディレンマと矛盾が作り出されているのだろうか？
6. 人種、階級、ジェンダーの連関性の複合的理解に基づくフェミニズム学識は、いかにして、われわ

れの知と社会生活を変革することができるのであろうか？

私は、まず最初に、これら3つの構成軸の概念的意味を論じ、次いで、中核テーマの理論的發展を分析し、この分野での新しい研究がわれわれの理論的理解をいかに前進させてきたかを示すいくつかの研究例を提示したい。

### 人種、階級、ジェンダー：概念的意味

人種、階級、ジェンダーは、アメリカにおける生活を構成する主要素として、規定的意味をもっているから重要であり、その意味は過去30年間に変化してきた<sup>4</sup>。それらは単なる、差異を表すために自己、アイデンティティ、主体のための土台として使用される個人の特性や特徴であるだけではない。それらはまた、個人の生来の属性および達成した属性と結びついた地位特性でもあり、個々人を社会秩序の階層の中に位置づけるものである。ジェンダーは、古い用語「性役割」が意味するような「役割」以上のものである。なぜなら、役割は、特定の場所あるいは組織的コンテクストを欠いた分析概念であるからだ。ソーン (Thorne 1980) は、「人種的役割」や「階級的役割」というようなものは社会学的用法にはない、と指摘した。大多数の研究者は、個人的説明から構造的説明へと移行し、人種、階級、ジェンダーの連関を、個人的特徴としてというより、関係の制度として概念化する。これらの関係は、基本的に、非対称的、不平等、階層的であり、構造に根差していて、イデオロギーによって維持され、支配と従属のシステムを形成している。この理由で、一部の学者は、人種、階級、ジェンダーは、個人的関係のシステム以上のものであり、個人を差異的に位置づける社会秩序の中心的階層化原則であると主張する。

簡単に言えば、人種、階級、ジェンダーは、社会の基本的な構造の構成要素であり、社会編成と人的インタラクションのプロセスの基底的原則である。各構成要素（あるいは、次元、部分、軸）は、別々にあるいは結合して、構造としてあるいはプロセスとして、社会的インタラクションを通して、個人間の関係、社会制度、自己、アイデンティティ、意味、個人の経験を形づける。ジェンダーの研究は、単に女性についての研究ではない。なぜなら、ジェンダーは関係的であり、男性も含むからである。セックスとジェンダーは、前者が生物的構築を指すのに対して、後者は社会的構築を指すという意味で、分析的には区別される。セックスとセクシュアリティは社会的に構築された要素も含むので、これらもまたしばしば、ジェンダー概念の中に含まれている。人種／エスニシティという用語は、社会的に構築された人種的／エスニック・グループと、彼らの独自の文化的編成の両方を意味する (Baca-Zinn and Dill 1994, pp. 11-12)。それゆえ、人種は時に、エスニシティを包含するように使用されたり、あるいは、両者はしばしば互換的に用いられる。階級は、経済的構造における人生の機会と位置を決定する要因である。人種、階級、ジェンダーの研究は、女性や有色人種の分析だけにとどまるものではない。それは、すべての社会制度を編成し、人的インタラクションを形づけ、社会的関係を形成し、社会における位置にしたがって人々の自己と人生経験を形づけるプロセスに作用する、社会的基幹構造の分析を伴うのである。アンダーセンは、次のように、簡潔に表現している。

人種は、社会的インタラクションを通して構築される社会的構造であり、社会的諸制度、人と人とのインタラクション、人種的に基礎を置いた社会秩序の中で生きる人々の考え方とアイデンティティに表出する。階級は、人種と同様に、物的、イデオロギーの関係、人間間の関係を編成する社会的構造で

ある。そして、フェミニスト研究者が示すように、ジェンダーは、社会を作り上げている諸要素の中に制度化されており、人種、階級と同様に、物的豊かさ、社会的アイデンティティ、グループ関係を形成する。(Andersen 1996, p. ix)

## 理論的発展の6つの主要テーマ

人種／エスニシティ、階級、ジェンダーの間の関係は、理論化と分析のために、どのように研究されるべきであろうか？まず最初に、この問題に取り組もう。これら3つの次元は同等な重みをもっているのか、それとも、異なった重みなのだろうか？初期の研究は、人種、階級、ジェンダーを、別個の構成的次元として扱い、それぞれを他と関係づけることなく検討する傾向にあった。3つの次元が関連していると見られるようになる、議論は、3つは重要度において同等なのか、それとも重要度の階層的な秩序において共存しているものとして扱われるべきなのかをめぐって行われた。それぞれは、同じ強度で作用し、同等の強力な結果を生み出しているのか？3つの相互作用の結果はどのようにして増幅するのか？

私は、二者択一的アプローチは避けるべきであるという立場を取る。そこで、人種、階級、ジェンダーについての最近の学識に関して、私が提案する第1のテーマは、問題の構成と分析のための出発点として、これらの3つの次元を同時的に、また決定的に重要なものとして扱い、理論化と分析のために、どれか一つまたは一つ以上の次元を、状況に応じて流動的に適用していくことは有益である、という点である。例えば、妻の殴打というようなドメスティック・バイオレンスは、ジェンダーの次元が他よりもより一層顕著であるかもしれないのに対し、黒人少女の間の十代の妊娠の研究においては、ジェンダーと共に、人種と階級の次元が、適切な説明のためには必要かもしれない。したがって、人種、階級、ジェンダーがいかに交差し、それらの同時的態様がいかに異なっているかは、非常に流動的プロセスである。研究課題の設定のされ方、研究対象である社会的現象の種類、使用される視座、要求される分析のレベルによって異なるものである。

近年の研究の第2のテーマは、人種、階級、ジェンダーは、連関して同時に作用し、男女の人生経験を形づける構造的条件と社会的プロセスの上に、インタラクティブで、相互的、累積的な効果を及ぼす、支配と意味の複数のシステムを形成している、という点である。この連関的關係を強調する研究は、3つの次元の間に重要な関係をつけ、分析を広く深い理論的コンテキストに置く。なぜなら、それらはジェンダーによる差異化やあらゆる形の不平等の不可分の決定因であるからである。3つの構成要素は、持つ者と持たざる者、人種的多数者と少数者、女性と男性の間の基本的関係を支配することにおいて、関連するのである。ジェンダーのダイナミクスは、生活の社会的編成に複雑に編み込まれた人種的・階級的差異、諸関係、不平等の広いシステムの中に結びついている。デボラ・キング (Deborah King 1988) が指摘するように、これら3つの構成要素は単なる追加的なものではない。例えば、底辺階級のアフリカ系アメリカ人女性の不安定な地位を表現するために用いられる、「二重の」とか「三重の危険」という表現が意味するようなものではないのだ。そうではなく、3要素は相互作用的であり、いろいろな状況における女性と男性に異なる結果をもたらすものである。追加的モデルが構造的連関を無視していることを批判して、アンダーセンとコリンズ (Andersen and Collins 1995) は、人種、階級、ジェンダーを、社会構造の、異なるが相互関連した軸であり、それらは同時に作用して支配のマ

トリックスを形成するものとして概念化している。この支配のシステムは、相互連関的に作用して、力と特典へのアクセスや社会的関係に影響し、意味を構築し、人々の日々の経験を形成する。コリンズ (1991, p. 222) はインタラクティブなアプローチを支持して、「黒人フェミニズムは、抑圧への追加的アプローチの拒否という、重要なパラダイム移行を促進する」と主張しているが、私もこれに賛同する。理論化は、単純な追加的モデルから累加的モデルへと移行し、3つの軸のインタラクティブで、相互的、累加的な作用と、これら3つの同時的態様のダイナミクスに焦点を置いたものへと移行してきた。

人種、階級、ジェンダーのインタラクティブな作用の研究は、量的アプローチおよび質的アプローチの両方によって行われてきた。ウー・シューとアン・レフラー (Wu Xu and Ann Leffler, in Chow et al. 1996) は、要因をコントロールした統計的分析を行って、アメリカの白人、黒人、ヒスパニックの男女に対する、人種とジェンダーそれぞれの独立した影響と合同の影響を実証的に検証した。彼女たちは、労働者が獲得する職業的威信 (prestige) において、人種はジェンダーよりもより強力なインパクトを与えること、しかし、ジェンダーは特定の人種グループ内で影響力を及ぼすことを示した。職業的セグレーションと収入に関しては、人種の影響はあるものの、最も強力な影響はジェンダーであった。彼女たちは、また、職業的威信と職種のジェンダーと人種の構成割合との間には相関関係があること、すなわち、ジェンダーと人種のインタラクティブな作用の存在を報告している。

例えば、アメリカでは、女性は、自分の家庭での主婦役割と母親役割の家庭外への延長として、家事サービス労働者の大部分を構成している (83.3%) が、これらの大部分は人種的少数者である (U.S. Department of Labor 1995)。日系の家事サービス労働者についての研究 (Glenn 1986)、アフリカ系の研究 (Dill 1988; Rollin 1985)、ラテン系の研究 (Romero 1992) は、これらの人種的少数者の女性たちによる仕事と家庭生活の両立のための努力に対して、階級的な位置がいかに交差しているかを示す質的に重要な例を提供している。彼女たちは、低賃金でほとんど行き止りの仕事のために長時間労働し、時には仕事の保障もあるいは安定した収入もほとんどなく、自分たちの家族の世話に加えて他の家族の世話もしている。彼女たちは、社会からの尊敬もほとんど受けることがないにもかかわらず、尊厳さをもって仕事をしている。彼女たちは、支配的人種のより上層の階級の女性たちが家庭の外で魅力的仕事をし、家族との余暇を楽しめるような機会をもつことを可能にするために、家庭内の些少な仕事を代行する。人種と階級にかかわる状況が一緒になって、ジェンダー作用を生み出しているのであり、それは、これらの家事サービス労働者と彼女たちを雇用する女性たちの間に、重要な経験的な分裂を生み出している。

ジェンダーは、用語の定義上、男性も含む。マイケル・メスナー (Michael Messner, in Chow et al. 1996) は、スポーツは、男性間、男女間の人種、階級、ジェンダーによる不平等を作り出すことに作用している制度であるとして、スポーツにおける男性性の構築について分析している。スポーツにおける男性性は明らかに差異化されており、高い地位の白人男性スポーツマンにとっては連帯とヘゲモニックな男性性を作り出すのに対し、低い地位の非白人男性スポーツマンにとっては選択を制限し、縁辺的男性性を作り出している。男性がグループとしては女性を支配していることはほとんど事実だが、スポーツは男性の間に衝突を生み出し、彼らの人種と階級ゆえに、この支配の果実を非常に不平等に分配している。

近年における研究の第3のテーマは、社会構造と自己の複雑な交差やマクロ構造的力と人的インタラ

クシヨンの間の関係を記述し、解釈する上で、人種と階級は、ジェンダーと同様に重要であるということである。人種、階級、ジェンダーの連関的關係は、異なる時間と場所における男女にとって、異なる社会的条件と経験を生み出す。この関係は、社会的実践を正当化し、力関係を強化し、人的インタラクションと日々の経験を形づける状況を創出する、社会制度のなかに根差した一連の階層化する力を作り出している。これらの連関的諸力のコンテクスト化は、多面的支配制度における男女の社会的位置と支配を支える社会制度の分析を要求する。これらの制度は非常にジェンダー化されており、人種と結びついており、階級と関連しており、既存の階層秩序を維持し、機会、力、リソースにおける差異を決定し、そして男女の多様なグループの態度と行動に影響するための、コントロールのシステムとして作用している。

女性の主観的経験を広い社会における客観的条件に連関させるとき、フェミニズム研究者は、マクロとミクロの関連の再概念化という知的挑戦に取り組む。拒食と過食という2つの極端な症状を示す摂食行動を取り上げよう。通常の流行病研究は、摂食障害は主として白人の中産階級と上層階級の異性愛者の現象であると指摘してきた。若い女性、特に少女たちは、ファッションのモデルや商業主義によって描かれる「瘦身文化」を受け入れ、それに従う。自分のボディ・イメージを意識して、彼女たちの一部は、大食した後に食べた物をはき出すというブリミック行動を引き起こす。しかし、ベッキー・トンプソン (Backy W. Thompson, in Chow et al. 1996) の洞察的研究は、摂食障害は、貧困、性的利用、人種差別、異性愛主義の構造的不平等によって作り出されたトラウマに原因があることを示した。ドラッグと異なり、食べ物は安価であり、大量の消費のためにも容易に入手できる。摂食障害は、実際、アフリカ系アメリカ人、ラテン系、レズビアン女性たちが、人生のトラウマに関連している「同時的抑圧」に対抗して闘うときにとる、サバイバルのためのジェンダー化された作戦である。ムカイ、カンバラ、ササキ (Mukai, Kambara and Sasaki 1998) は、日本人とアメリカ人の女子の大学生についての比較研究において、両グループは同程度に摂食障害行動を示したが、日本人女子学生はアメリカ人女子学生に比べ、自分の体への不満感がより強く、社会的承認をより必要とすることを発見した。

人種、階級、ジェンダーの研究についての第4番目のテーマは、どのように私的領域と公的領域が緊密に関連しているか、どのように生産と社会的再生産が複雑に関連しているか、その関係の仕方についてのものである。「公私領域の分離原則」は、夫と父は、生計費の唯一の稼得者として、公領域で雇用されて家族を養うための家族収入を稼ぎ、妻と母は、主として、私領域で無償の家内労働を担当し、情緒的支持、愛情、ケアを提供する責任を持つ、という伝統的考え方である。しかし、この非常にジェンダー化された役割区分は、白人の中産階級女性にとっては、部分的に現実の反映ではあるかもしれないが、すべての女性に普遍的に当てはまるわけではない。有色女性、移民女性、単親の女性世帯主にとって、また若いシングルあるいは未婚の女性にとっても、家の外での有償の雇用労働は、歴史的に、娘、妻、母として当然担うべき主要な役割の一部であった。同時に、これらの女性たちは、無償の家内労働、子供の世話、その他の家庭維持のための仕事を家で言い、二重あるいは三重の労働を担当した。彼女たちは、過重負担であったが、公領域では生産労働者として低い評価を受け（すなわち、男性のように家族賃金を稼ぐことはなく）、私領域でも再生産労働者として低い評価を受けた（すなわち、労働は無償）。女性の労働力参加の上昇（子供のいる女性も含めて）、離婚の増加による女性と子供の困難な状況、女性が支える単親世帯の増加、仕事と家庭の両立の必要は、「公私領域の分離」モデルを、次第に、白人女性にとっても当てはまらないものにしていく (Chow and Berheide 1988)。大部分の女性の



人生における両領域の相互流入は、両領域でのジェンダーによる労働分業の記述を時代遅れのものにした。

次の2つの研究は、このテーマの本質的意味を示すのに役に立つだろう。ナンシー・ネイプルズ (Nancy Naples, in Chow et al. 1966) は、母親業、コミュニティの仕事、有償労働、政治的活動主義の間の複雑な関連を探究することによって、分離した二領域の考え方に挑戦している。女性たちは、一般的には、家事労働の延長として、コミュニティの仕事をするように動機づけられているかもしれない。ネイプルズは、人種/エスニシティ、階級、性的指向、居住地域によって形成される異なる立場が、黒人女性やラテン系女性がどのように家族とコミュニティのニーズをとらえ、それを満たすためにどのような政治的作戦をとっているかに影響するという事実を発見した。ネイプルズが観察した、コミュニティのための労働をする女性たちは、「政治的に活動的な母親業」について、子供、家族、コミュニティのニーズと取り組むために、母親たちによる社会的活動主義を含む、と定義した。この概念化は、母親業、労働、政治のインタラクティブな性質についての再考を表しており、公私の分離という神話を壊すものである。

プエルトリコでは、近年における女性の労働力参加の増加は、経済の再編成と輸出主導の産業化によって、フォーマルな経済部門において労働力需要が増加し、仕事の機会が拡大した結果である。バーバラ・ズェムピックとチャンク・ピーク (Barbara A. Zsembik and Chunk W. Peek, in Chow et al. 1996) は、プエルトリコ女性の初子出産後の労働復帰について、労働市場における生産労働と家庭での再生産労働との間の最初の衝突として分析している。女性の労働力に対する需要の増加は、労働と家庭生活への新しい形態のかかわり方を生み出し、家事労働と育児に専念したいと思っても賃金を失うことは難しい。

近年における研究の第5番目のテーマは、人種、階級、ジェンダーのインタラクション、その結果としての支配のマトリックス、その態様のダイナミックな同時性が、男女の生活における弁証法を作り出すということである。これらの、複数の、しかし相互連関的な支配と抑圧の諸力間の弁証法は、男女に緊張、制約、矛盾を生み出す。加えて、これらの弁証法は、文化と社会、構造とプロセス、制度と個人の特徴を強化あるいは制限するかもしれない。機能主義的説明とは逆に、弁証法においては、それは必ずしも機能障害的ではなく、女性が、さまざまな形の構造的支配と不平等に対し、交渉し、対処し、抵抗さえする機会を創出するかもしれないのだ。

人種、階級、ジェンダーの相互連関とその同時性は、制度の編成と人々の生活の社会的編成にしばしば現われる弁証法にとっての構造的源泉である。職場、家族、コミュニティは、相反する力が複雑に作用する矛盾、抗争の場となっているのであり、そこは、女性のエイジェンシー (行為者性) が具体的に現われる場なのである。ピエrette・ホンダニューソテロ (Pierrette Hondagneu-Sotelo, in Chow et al. 1996) は、アメリカへの移住は、メキシコ人家族にとって、よりよい機会を求めてのジェンダー化されたプロセスであることを示した。長期にわたる夫婦の別居、コミュニティの社会的ネットワークへのアクセス、夫がアメリカで法的地位を獲得できるか否かは、家父長的権威、ジェンダー関係、世帯内での伝統的なジェンダー分業、日々の生活の条件を変更した。このような構造的変化は、これらの家族内での家父長制的関係の流動的性格を示すものであった。女性たちは、家父長的コントロールに挑戦し、反対し、転覆し、弱化することができた。それにより、彼らがアメリカに移住したとき、より平等な夫婦関係へと向かうことを促進した。

アメリカに最近移住したベトナム人移民についてのエスノグラフィックな研究において、ナルジ・キブリア (Nalzi Kibria, in Chow et al. 1996) は、女性グループとネットワークが、社会的、経済的リソースの世帯間の交換と家族内の男女の争いの調停において、いかに重要な役割を果たしているかを研究した。ホンダニューソテロと同様、キブリアの研究は、移民のプロセスの結果として男女間のリソースに変化が生じるために、ベトナムでの「古い」家父長制的取り決めは、再交渉され、修正されるかもしれないことを示した。彼女は、女性のコミュニティ・グループは、妻への暴力というような問題が生じた場合、しばしば、男性の権威を受容できる範囲内に制限するためのサポート源となっていると主張した。「新しい」家父長制的取り決めにおいて、女性グループは、しばしば、家族の保護者として、また女性の特定の利益の支持者としての役割を果たす。しかし、ベトナム人男女の間のこの新しい取り決めは、まだ非常に弱く、ベトナム人移民コミュニティにおけるジェンダー関係を大きく変革するほど強いものとはなっていない。

近年における研究の最後のテーマは、理論、研究、実践（行為の仕方）を通して社会学的知を変革するために、人種、階級、ジェンダーの相互連関を研究する必要性に関するものである。フェミニズムは理論（思考の仕方）であり、分析方法であり、そして実践である——これらは皆、フェミニズムの認識論と社会変化のヴィジョンにとって中心的である。より広いフェミニズム理論と研究のアジェンダの一部として、多くの研究者は、人種、階級、ジェンダーの相互連関の問題に、理論的に、実証的に、また実際の適用を通して、取り組む必要性を認識している。知とカリキュラム、ペダゴジー、政策、実践の変革を通して、新しい洞察と理解をもたらすためである。

新しいフェミニズム学識は、人種、階級の軸を包含することによって、ジェンダー分析における知的言説の範囲を拡大し、視座を深めてきた。構築論的フレームワークから離れて、ウェストとジーママン (West and Zimmerman 1987) は、エスノメソドロジーのアプローチを用いて、プロセスとしてのジェンダーに新しい洞察を提示した。この研究は、ジェンダーを状況的な行為として再概念化することによって、プロセスの次元を加えた。差異が「ジェンダーをする」ことを通して構築されるや、それらは、ジェンダーの「本質性」を強化するために用いられ、ジェンダー行動に具体化され、制度的編成として正当化される。1995年に、ウェストとフェンスタマカー (West and Fenstermaker, in Chow et al. 1996) は、「ジェンダーをすること」を「差異をすること」へと拡大するという、第二の挑戦的仕事に取り組んだ。彼らは、「差異をすること」を「経験の総体」として、また複数の形態の支配を生み出すインタラクシオンの、制度的作用の結果として見ることにより、人種、階級、ジェンダーの同時性を再概念化した。日々の経験において、人々は、自分自身およびお互いを、人種、階級、ジェンダーの所属を基礎にしてカテゴリー化し、人的インタラクションと制度的プロセスにおいて、そのカテゴリーに従って行動する。いったん制度化されるや、これらのプロセスは、それ自体で差異を生産し再生産するメカニズムとなる。人種、階級、ジェンダーをすることによって生じる結果は、これらのカテゴリーを基礎にした社会的編成を通常で自然的なものとして、社会生活のあり方を正当化し、人種、階級、ジェンダーの秩序を維持している。

フェミニズム理論の発達に比べると、フェミニズム方法論の構築は、非常に多かったとはいえない。それは、フェミニズム方法論の特別な特徴は概念化が困難であること、伝統的な方法論的アプローチから明確に異なることが困難であるという理由による。スミス (Smith 1987) が示唆するような、「日々の世界を問題化」して分析し女性に声を与えるというような、単に女性の立場を組み入れることだけで

は、不十分である。シャーレイ・ゴアリック (Shirley Gorelick, in Chow et al. 1996) は、女性の抑圧の内面化と虚偽の意識、および個人の外側にある隠されている抑圧の構造が、女性たちに、自分たちが置かれている状況を適切に理解し、声を与えることを妨げているのだ、と説明している。女性の見方を下から、そして縁辺から中心へと移し、ゴアリックは、研究対象者の活発な声と研究者自らの弁証法的な分析の両方を説明するような方法で、女性の経験を再構築することが必要であると提案している。彼女は、フェミニズムの知を理論、行為、経験に基づいて再焦点化し、再考するために、多様な人種、階級、ジェンダーに加え、他の抑圧されたグループからの研究者と研究への参加者によって提示された新たな視点を取り入れ、「社会的位置 (standpoint) を土台にした方法論」を再考することを促している。

最近の、シュラミット・レインハーズの研究 (Shulamit Reinharz, *Feminist Methods in Social Research*, 1992) とダイアナ・ウルフの研究 (Diana L. Wolf, *Feminist Dilemmas in Fieldwork*, 1996) は共に、有色女性についての量的および質的に多様な研究方法と研究例を提供している。

人種／エスニシティ、階級、ジェンダーに関する知は、また社会的運動、政策分析、コミュニティでの活動主義の研究にも応用されてきた。公民権運動において英雄的で価値ある役割を演じた南部黒人女性の不可視性を分析して、バーニス・バーネット (Bernice M. Barnett, in Chow et al. 1996) は、人種、階級、ジェンダーの三重の制約が、運動における黒人女性のリーダーシップと参加をいかに規定したかを示した<sup>5</sup>。バーネットと同様、チャウ (Chow, in Chow et al. 1996) は、歴史的に、人種、階級、ジェンダーのインタラクションが、いかにアジア系アメリカ女性の日々の経験を形づけてきたか、彼女たちのフェミニスト意識の発達の仕方や、政治的活動主義の度合いに影響を与えたかを分析した。彼女たちのフェミニスト意識は、ジェンダー秩序だけでなく、人種、階級の構造にも根差しており、複数の抑圧、グループを横切る忠誠、アジア系アメリカ人コミュニティにおける他の人々との衝突、との間の弁証法を作り出している。ナンシー・ネイブルズ (1998) は、近年、その努力を、多様なグループの女性たちとの間の、人種、階級、ジェンダーを横切る活動の組織化におけるコミュニティ活動主義とフェミニスト政治の研究に向けている。

政策の分野では、シンシア・デイチとキム・ブランケンシップ (Cynthia Deitch and Kim M. Blankenship, in Chow et al. 1996) は、1964年の公民権法第7篇と1963年の賃金平等法のそれぞれ2つの政策分析を行った。彼女たちは、これら2つの法律の成立の勝利と矛盾を実証している。これらの研究は、人種、階級、ジェンダーの衝突に国家がいかにばらばらに分断的に介入し、女性と人種的／エスニック少数者グループに異なるインパクトを与えたかを理解するために、ジェンダー化され、人種差別的、階級的な国家を取り入れた再概念化を提案している。これらの応用的研究は、実践に関連する研究と共に、女性のエイジェンシーの重要性を強調し、日々の対処における彼女たちの「フェミニスト」実践——彼女たちの闘争と抵抗の作戦、彼女たちの人種、家族、コミュニティの地位向上のための政治的活動主義、集団的エンパワメントと社会的変化のための主張——を、鮮明に描いている。

### 複眼的な理論と知に向けて

バカジン、ウィルキンソンと私は、共同で編集した著書 (1996) の中で、多様な男性と女性のそれぞれの位置における共通性と差異、支配と従属、縁辺性と中心性の複雑さを、歴史的、制度的、そしてより広い社会的コンテクストにおける人種、階級、ジェンダーの連関に関連しているものとして、コンテ

クスト化された理解を推進しようと努めた。この本に収録されている研究は皆、社会構造と個人的生活の多様な連関を記述し、説明し、解釈することによって、人種、エスニシティ、階級、ジェンダーが、いかに主要な社会制度、日々のインタラクションの中に構造的に相互関連しているかについての深い思想的、体系的議論を提供する。この歴史的局面において、私は個人的に、より一層洞察的な理論は、われわれが、女性の経験と男性に対する彼女たちの立場を理論的な分析の中心的焦点として問題化し、コンテキスト化するとき、社会的世界の複雑性、流動性、弁証法についての精緻な分析を提供する包括的知を生み出すであろうと信じる (Chow 1999)。

理想的には、複眼レンズを用いた学識は、人間の経験についての全体的見方へと導くようなパラダイム転換の可能性を提供する<sup>6</sup>。このような研究の方向へ動いていくさまざまな知的力がすでに現われている。私は、ここでの議論に最も適切な4点を選んで述べる。第1は、「3つの枝別れアプローチ」を超えて、これまで触れてきた「相互関連した軸のアプローチ」へと向かうべきであるか否か、という問題である。われわれの理論的焦点は人種、階級、ジェンダーにあるが、新しい、これらの3つの構造的柱がいかに複雑に、セクシュアリティ、年齢、世代、カースト、国籍、種族、肉体的能力といった他の構造的次元と結び付き、交差しているかに新たな関心を払うべきである。これらもまた、個人を差異化し、社会の多様な階層的レベルに位置づけるものである。異性愛の仮定とバイアスに挑戦する最近の研究は、セックスとセクシュアリティをジェンダー分析の中に再び取り入れ始めた (Rich 1980)<sup>7</sup>。アジア社会の場合、年齢と世代は、社会における女性の相対的地位を決定するうえで最も重要なものである。女性が年を積み、古い世代として年長者の地位を獲得すると、通常、尊敬と特典を手にするし、若い世代の男女、特に若い女性の上により多くの権威とコントロールをふるう—これは、近代的社会変化から見て修正されるかもしれないが。しかし、一部のアメリカ女性たちは、加齢と共にステイタスを失う。加齢は、アジアでは輝かしいことと見られるが、アメリカでは望ましくないことと見られている。したがって、ジェンダー、階級、年齢／世代の連関は、アジア女性、日本女性の分析において中心的かもしれない。

第2に、人種、階級、ジェンダーの視座を使用した研究の大部分は、主として一つのグループに焦点を置く傾向にある。知の変革は、単一のグループの分析を超えて、時間と場所を横切る多様なグループを関連づけることを要求するだろう。私は、多様なグループの男女の間の比較研究を優先的に行う必要があると考える。それにより、われわれは既存の理論をより適切に検証し、かつより洞察的な理論的思考を発見することが可能となるだろう。比較研究は費用と時間がかかり負担が多いので、目的を達成するためには、共同的努力が不可欠である。

第3は、複眼的な知の理論的發展における男性研究者の役割に関連している。男性、男性性、男性間および男女間のジェンダー関係の研究にフェミニズム理論を用いる、「男性のフェミニズム」が現われてきた (Lorber 1998)。男性支配はほとんどの社会で存在しているが、男性間にもまた支配と従属の二次的階層が存在しており、異なるマスキュリティを、ヘゲモニックなもの、縁辺的なもの、非難の対象となる望ましくないタイプのもの、へと差異化する (Connell 1995)。不利な立場にある男性は、支配的男性に比べ、地位も力も少ないかもしれないが、それでも彼ら自身のグループに属する女性たちを支配する傾向にある。男性によるフェミニズムのアプローチは、少年期、セクシュアリティ、ジェンダーの力関係、スポーツ、暴力的行動、家族、仕事の世界の分析に使用されてきた。これらにおいて、男性の支配、特権の構造、コントロールのメカニズム、性差別的実践が現われ維持されるのである (Brod

and Kaufman 1994; Connell 1987, Kimmel and Messner 1998)。複眼的学識が、差異と多様性に基づく人間の経験についての包含的見方を提供するためには、人種、階級、ジェンダーの研究における男性によるフェミニズム・アプローチは、ジェンダー・バランスのとれた知を生産するために必要である。

最後に、知の変革のための新しい方向は、社会現象、人々、文化、地域と全体、北と南の間を結びつける連関に依存するだろう。人種、階級、ジェンダーを研究することは、アメリカだけのことではなく、地球全体の関心である。この分析を地球全体のレベルにすることは、人種、階級、ジェンダーの境界を超えて他の次元（例えば、国籍と文化）が作用しているのか否かに関して、私たちの視座を広げ、より深い理論的理解を可能にする。「地域的に行為し、全体的に思考する」という格言は、理論化と分析において、私たちは皆、世界中の、異なる人種、エスニシティ、階級、カースト、国籍、種族、性的指向、肉体的能力の、男女、老若と結びついていることを、私たちに想起させるべきである。

## おわりに

もし私たちが、フェミニズムの認識論に基づく世界観を推進する上でよりダイナミックな力になろうとするなら、私たちが必要とするものは、私たちの理論的思考、方法論的アプローチ、実践、ペダゴジーをより鋭利にする新しい道具である。人種、階級、ジェンダーの研究は、新しい知的道具の一つであり、代替的な形の社会学的想像である。私がここで描くものは、理論において複眼的であり、方法において複数アプローチ的な知であり、それは、マクロな力とミクロなインタラクション、社会と自己、歴史と伝記、客観的条件と主観、公と私、理論と実践、全体と地域間の多様な関連を作るものである。私が希望するものは、単一的理論ではなく、複数のアプローチの理論である。このような複眼的な諸理論は、人種、階級、ジェンダーの3つの次元のどれか特定の一つを優先させるものではなく、一つ一つを超越するものである。これらの理論は、世界観について特定の中心（例えば、ヨーロッパ中心、アフリカ中心、アジア中心）を持つことはない。それらは、包含的、学科横断的、全体的であろうと努力するものである。

(訳 ホーン川嶋瑤子 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授)

## 注

1. 人種/エスニシティは、アメリカで、社会的、法的に従属的で、文化的に他と区別されるグループを指す。歴史的に、白人アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人、アジア/パシフィック系アメリカ人、原住民アメリカ人が、人種的にも文化的にも区別されるグループとして構築された。
2. 女性中心の関心事項がジェンダー中心のものとなったとき、知的、政治的意味をめぐって、かなりの議論が展開された (Chow, 1998)。1995年に北京で開催された第4回世界女性会議で、国連が、公式文書「行動綱領」と「北京宣言」を準備したときに、用語と言葉に関して同様の議論が国際的レベルでの言説にまで持ち上げられた。
3. チャウ論文 (1988)、「フェミニズム運動：アジア系アメリカ女性たちはどこに？」(“The Feminist Movement: Where Are All the Asian American Women?”)は、運動におけるアジア系アメリカ人の欠落症候群に対する直接の応答であった。
4. ジェンダーの概念的意味についてのより詳細な議論に関しては、チャウ (Chow 1998) を参照されたい。
5. また、カレン・アドラー (Karen S. Adler, in Chow et al. 1996) によるエイミー・ジャックス・ガーヴェイ (Amy Jacques Garvey) の伝記的分析を参照されたい。ガーヴェイは、黒人国民解放運動の共創始者でありガーヴェイズムの主要建設者である。

6. 私は、研究者の立場と視座を区別した。研究者が立つ立場にもかかわらず、彼／彼女の視座は異なりうるものであり、焦点において単一的でも複数のでもありうる。立場は、ある視座を他の視座よりも優遇することになるかもしれない。
7. アドリエンヌ・リッチ (1980) の強制異性愛とレズビアニズムについての重要な分析を参照されたい。『ジェンダーと社会』(Gender & Society) は「性的アイデンティティ／性的コミュニティ」と題する特別号 (1994年9月) を出版し、セックスとセクシュアリティの多面について考察している。

## 参考文献

- Acosta-Belen, Edna. *The Puerto Rican Woman*. New York: Praeger, 1979.
- Andersen, Margaret. *Thinking About Women: Sociological Perspectives on Sex and Gender*. Fourth edition. New York: Macmillan, 1996.
- Andersen, Margaret and Patricia Hill Collins, eds. *Race, Class, and Gender: An Anthology*. Second edition. Belmont, CA: Wadsworth, 1995.
- Baca Zinn, Maxine and Bonnie Thornton Dill, eds. *Women of Color in U.S. Society*. Philadelphia, PA: Temple University Press, 1994.
- Brod, Harry and Michael Kaufman, eds. *Theorizing Masculinities*. Newbury Park, CA: Sage, 1994.
- Chow, Esther Ngan-ling. "The Feminist Movement: Where Are All the Asian American Women?" In *Making Waves: Writings About Asian American Women*, eds. Diane Yen Mei Wong and Judy Yung. Boston: Beacon Press, 1988. pp. 362–377.
- . "Discourses on Sex and Gender." in *Feminist Foundations: Toward Transforming Sociology*, eds. Cindy Andersen, Kristen Myers, and Barbara Risman. Newbury Park, CA: Sage, 1998. pp. 247–256.
- . "Missing Feminist Revolution in Sociology: In Search of Scholarship on Race, Class, and Gender and Global Feminism." Paper presented at the Annual Meeting of the American Sociological Association held in Chicago in August, 1999.
- Chow, Esther Ngan-ling and Catherine White Berheide. "The Interdependence of Family and Work: A Framework for Family Life Education, Policy, and Practice." *Journal of Family Relations* 37 (1988): 23–28.
- Chow, Esther Ngan-ling, Doris Wilkinson, and Maxine Baca Zinn, eds. *Race, Class, and Gender: Common Bonds, Different Voices*. Newbury Park, CA: Sage, 1996.
- Collins, Patricia Hill. *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. New York: Routledge, 1991.
- Combahee River Collective. "A Black Feminist Statement." In *But Some of Us Are Brave*, eds. Gloria T. Hull, Patricia Bell Scott, and Barbara Smith. Old Westbury, NY: The Feminist Press, 1982. pp. 13–22.
- Connell, R. W. *Gender and Power: Society, The Person and Sexual Politics*. Stanford: Stanford University Press, 1987.
- . *Masculinities*. Berkeley, CA: University of California Press, 1995.
- Dill, Bonnie Thornton. "The Dialectics of Black Womanhood." *Signs* 4 (1979): 543–555.
- . "Race, Class, and Gender: Prospects for an All Inclusive Sisterhood." *Feminist Studies* 9 (1983): 131–150.
- . "'Making Your Job Good Yourself': Domestic Service and the Construction of Personal Dignity." In *Women and the Politics of Empowerment*, eds. Ann Bookman and Sandra Morgen. Philadelphia, PA: Temple University Press, 1988. pp. 33–52.
- Garcia, Alma M. "The Development of Chicana Feminist Discourse." *Gender & Society* 3 (1989): 217–238.
- Glenn, Eveyln Nakano. *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese Women in Domestic Service*. Philadelphia, PA: Temple University Press, 1986.
- hooks, bell. *Ain't I a Woman: Black Women and Feminism*. Boston, MA: South End Press, 1981.

- . *Feminist Theory: From Margin to Center*. Boston, MA: South End Press, 1984.
- Hull, Gloria T., Patricia Bell Scott, and Barbara Smith, eds. *But Some of Us Are Brave*. Old Westbury, NY: The Feminist Press, 1982.
- Kimmel, Michael S. and Michael A. Messner, eds. *Men's Lives*. Boston, MA: Allyn and Bacon, 1998.
- King, Deborah. "Multiple Jeopardy, Multiple Consciousness: The Context of a Black Feminist Ideology." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 14 (1988): 42–72.
- Ladner, Joyce. *Tomorrow's Tomorrow*. Garden City, NY: Doubleday Anchor, 1971.
- Lorber, Judith. *Gender Inequality: Feminist Theories and Politics*. Los Angeles, CA: Roxbury, 1998.
- Martineau, Harriet. *Society in America*. Paris: Baudry's European Library, 1837.
- . *How to Observe Manners and Morals*. London: C. Knight, 1838.
- McIntosh, Peggy. "Interactive Phases of Curricular Re-vision." In *Toward a Balanced Curriculum*, eds. Bonnie Spanier, Alexander Gloom, and Darlene Boroviak. Cambridge, MA: Schenkman Publishing, 1984. pp. 25–34.
- Mirande, Alfredo and Evangelina Enriquez. *La Chicana: The Mexican-American Woman*. Chicago, IL: The University of Chicago, 1979.
- Moraga, Cherrie and Gloria Anzaldúa. *This Bridge Called My Back: Radical Writings by Women of Color*. Watertown, MA: Persphone Press, 1981.
- Mukai, Takayo, Akiko Kambara, and Yuji Sasaki. "Body Dissatisfaction, Need for Social Approval, and Eating Disorders Among Japanese and American College Women." *Sex Roles* 39 (1998): 751–763.
- Naples, Nancy, ed. *Community Activism and Feminist Politics: Organizing Across Race, Class, and Gender*. New York: Routledge, 1998.
- Reinharz, Shulamit. *Feminist Methods in Social Research*. New York: Oxford University Press, 1992.
- Rich, Adrienne. "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence." *Signs* 5 (1980): 631–660.
- Rollins, Judith. *Between Women: Domesticity and Their Employers*. Philadelphia, PA: Temple University Press, 1985.
- Romero, Mary. *Maid in the U.S.A.* New York: Routledge, 1992.
- Schuster, Marilyn R. and Susan R. Van Dyne, eds. *Women's Place in the Academy: Transforming the Liberal Arts Curriculum*. Totowa, NJ: Rowman and Allanheld, 1985.
- Smith, Dorothy. *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*. Boston: Northeastern University Press, 1987.
- Tetreault, Mary Kay Thompson. "Feminist Phase Theory: An Experience-derived Evaluation Model." *Journal of Higher Education* 56 (1985): 363–384.
- Thorne, Barrie. "Gender. . . how is it best conceptualized?" Paper presented at the Annual Meeting of the American Sociological Association, 1980.
- U.S. Department of Labor. *Employment and Earnings*. Washington, D.C.: Government Printing Office, 1995.
- West, Candace and Don H. Zimmerman. "Doing Gender." *Gender & Society* 1 (1987): 125–151.
- Wolf, Diane L. *Feminist Dilemmas in Fieldwork*. Boulder, CO: Westview Press, 1996.